

目次

(総論) 「転換期の国際社会」を知識人たちはどう捉えたのか	伊藤 信哉 萩原 稔
一 本書の問題関心	2
二 本書の分析対象	5
三 本書の特徴	8
四 各章の内容と執筆者について	10
五 用字と形式	22
六 続編『近代日本の対外認識Ⅱ』について	23
第一章 有賀長雄の対外認識	
—— ある学者官僚の栄光と蹉跌	伊藤 信哉
一 「帝国主義外交」の伝道者	29
二 清国の分割から日露戦争まで	32
三 日露戦争から辛亥革命まで	46
四 「大正新時代」の落伍者	53

第二章 デモクラットの対外認識

——吉野作造・石橋湛山を中心に

平野 敬和

- 一 近代日本のデモクラットを論じること……………76
- 二 吉野作造の対外認識……………81
- 三 石橋湛山の対外認識……………94
- 四 吉野作造・石橋湛山への評価の問題……………103

第三章 「強いアメリカ」と「弱いアメリカ」の狭間で

——「ワシントン体制」への国際政治過程

中谷 直司

- 一 ヴェルサイユ後の国際交渉……………113
- 二 「ワシントン体制」……………117
- 三 アメリカのイニシアティブと日本の反応……………122
- 四 イギリスの苦悩……………134
- 五 結論——ワシントン会議と縮小された「ウィルソンのプログラム」……………143

第四章 モンゴル認識の形成

——戦略と「大義名分」の系譜

鈴木 仁麗

- 一 モンゴル認識の二つの類型……………158
- 二 探検の時代——「自己」を知る・未知への関心……………161
- 三 偵察の時代——実利の追求・「蒙古王」との出会い……………165
- 四 研究・調査の時代——日露戦争が拓いた新たなフィールドで……………169
- 五 鳥居龍蔵の「貢献」……………175
- 六 持続する「好感」のなかで……………182

第五章 戦間期の日本と満洲

——田中内閣期の満洲政策の再検討

北野 剛

- 一 日本と満洲の関係をいかに見るか——課題と視角……………196
- 二 第一次世界大戦後の満洲金融問題……………197
- 三 満洲金融問題をめぐる政府と現地……………201
- 四 東方会議と満洲……………205
- 五 山本条太郎の満鉄経営再編……………209
- 六 日満関係の模索……………213
- 七 満洲経済問題のもたらすもの——結びにかえて……………216

第六章 一九三〇年代の日本の右翼思想家の対外認識

——満川亀太郎・北一輝を中心に……………萩原 稔

- 一 「大東亜戦争」は必然だったか？——右翼運動の高揚と日本の針路……………228
- 二 満洲事変への反応……………232
- 三 中国認識の諸相……………239
- 四 西洋諸国に対する認識の諸相……………245
- 五 むすびにかえて——右翼にとって「対アジア戦争」とはなんだったのか……………255

第七章 終戦前後における日本外務省の国連認識

——国際連盟での教訓と国際社会への復帰……………服部 聡

- 一 国際連盟での経験と教訓……………268
- 二 国連創設の動きを日本はどうとらえていたか……………279
- 三 戦後日本と国連……………288

第八章 リベラリストの悔恨と冷戦認識

——芦田均と安倍能成……………上田 美和

- 一 二人のリベラリストの戦後……………304
- 二 新憲法成立期（一九四五―五〇年）……………306
- 三 朝鮮戦争期（一九五〇―五三年）……………316
- 四 五五年体制成立期（一九五三年以降）……………328
- 五 リベラリストの分岐点——むすびとして……………338

あとがき……………353

伊藤信哉・萩原稔編著『近代日本の対外認識 I』彩流社、2015年5月刊。